

Title	「局地的市場」仮設の方法的検討
Sub Title	Die Prüfung der hypothese "von dem lokalen Raumwirtschaft"
Author	寺尾, 誠
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1973
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.66, No.10 (1973. 10) ,p.764(58)- 777(71)
JaLC DOI	10.14991/001.19731001-0058
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19731001-0058

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「局地的市場」仮説の方法的検討

寺 尾 誠

1. ま え が き

古典古代の沿岸文化に対するヨーロッパ中世の内陸文化という対照、これによって封建ヨーロッパ社会の商品経済の独自性を鮮明しようと考えていたのは、ヴェーバー⁽¹⁾である。奴隷制を基盤とする古典古代の商品経済が粗放的であるのに対し、封建的小農制の中世ヨーロッパでは商品経済がより集約的であったというのである。別の論文でヴェーバーは「最少の局地的集落内部及びその相互間の財の交換」(the exchange of goods within and between the smallest local communities)という表現を使用しているから、この「内陸文化」概念が局地的商品経済という極限概念をも内包していたと理解して差し支えない⁽²⁾。

産業資本主義商品経済の培養基として局地的商品経済をとらえる視点をヴェーバーと共有し、さらにこれを極端な迄に純粹化したのが大塚久雄である。生産者

か商人か、農村の織元か都市の織元か、資本主義発達に関するこの「二つの道」仮説から出発した大塚は、種々の批判に対する積極的反批判として「局地内分業=市場圏⁽³⁾」という作業仮説を提出したのである。

この仮説作成に当り大塚が参照したのはコスミンスキー、グラス、レーニンの史実解釈乃至は理論モデルであった。

コスミンスキーは、封建ヨーロッパの貨幣経済を一般的な商品経済概念(例えばドーブシュ)で一色に塗りつぶすことに異議を唱え、領主の商品経済と農民の商品経済の対抗関係としてとらえるべきことを主張する。そして、局地的市場で展開する後者のみが、封建危機の真の醸成因となりうるという⁽⁴⁾。

グラスは、イギリス穀物市場の史的展開を分析し、中世初期には荘園間の穀物取引が支配的であったのに対し、荘園制の衰退が始まる12、13世紀からは各地方毎にかなり独立した「地方市場圏」(local market area)が発展するという事実を発見する。その後、16、17世

注(1) Max Weber, Agrarverhältnisse im Altentum, in: Handwörterbuch der Staatswissenschaft, 3. Aufl. 1909, S. 43, 254 f.; Derselbe, Wirtschaftsgeschichte, 1923, S. 119 f., 124.

(2) M. Weber, Capitalism and rural society in Germany, in: From Max Weber. Essays in Sociology, edited by H. Gerth and C.W. Wright Mills, 1947, p. 377; その独文は Kapitalismus und Agrarverfassung, in: Zeitschrift für die gesamte Staatswissenschaft, Bd. 108. 1952, S. 444. なお、かつて私はドイツ訳の Gütertausch innerhalb und zwischen den kleinsten Ortschaften から「最少の集落内部及びこの相互間の商品交換」と表現したが、今回は英訳の「最少の局地的集落……」の方をとった。ヴェーバーの「局地」概念を示すにはこの方が適当と思われたからである。

(3) 大塚久雄「資本主義社会の形成」社会科学講座第4巻、第6巻1951年の論文、後に大塚久雄著作集第5巻3—23頁、同氏「資本主義発達の起点における市場構造——経済史からみた『地域』の問題」同著作集第5巻24—45頁、同氏「近代化の歴史の起点——とくに市場構造の観点からする序論——」同著作集第5巻46—90頁、同氏「リーランドの『紀行』に見えたる当時の社会的分業の状態——マニファクチャー期開始点における国内市場の地域性について——」同著作集第5巻91—143頁。

(4) E.A. Kosminski, The Hundred Rolls of 1279—80 as a source for english agrarian history, in: Economic History Review, vol. 3, no. 1, 1931, p. 36, 44.; id., Service and money rents in the 13th century, in: Economic History Review, vol. 5, no. 2. 1935, p. 43—44; id., The Evolution of feudal rent in England from 11—15 centuries, in: Past and Present, no. 7, 1955, p. 20, 26, 31 seq.

紀にはロンドンの穀物需要を充たす「首都市場圏」(metropolitan market area)が隆盛に向い、17世紀後半には首都を通じての輸出市場が生誕する。グラス自身の研究関心は、地方市場圏と首都市場圏の相互関係の推移にあったのである。⁽⁵⁾

レーニンは「市場問題について」という理論素描の中で農民層の分解は資本主義の衰退をもたらすというナロードニキの見解に反対し、それは社会的分業と労働力の商品化の発展に伴い、資本主義的国内市場の形成を結果すると主張した。彼は、6人の生産者から成る単一の共同体を理論モデルに、この命題を論証しようとしたのである。⁽⁶⁾

大塚は、農民的商品経済こそ産業資本主義経済の起点だというコスミンスキーの見解に基本的に同意する。そして、農民的商品経済の展開基盤は共同体内＝局地的内分業であり、そこに成立する市場関係が「局地的市場圏」だというのである。それは「農村共同体内部の農民たちの間に形成される社会的分業であるが、事実上は初めから多少とも一共同体よりは広い地域をその圏内に巻き込み、『局地的市場圏』(local market area)という姿で現われてくる。」⁽⁷⁾即ち、14世紀後半のイギリスでは「比較的農業的色彩の濃い村々に取り巻かれた小規模な商工業の中心地、そうした両種の諸村落の組み合わせが、市場経済の上に立ち多かれ少なかれ経済的自給自足への傾向を示すような社会的分業関係の独立な単位地域として、しだいに姿を現わしつつ」あるという。⁽⁸⁾

この「局地的市場圏」という極限概念には、コスミンスキーを始め彼自身を含む多くの研究者の実証研究から結論される農民的商品経済の革新的意義がこめられている。それは、また、グラスの「地方市場圏」概念をレーニンの単一共同体モデルにより、極限にまで圧縮した結果でもある。⁽⁹⁾

2. 本質的地域経済概念としての「局地的市場圏」仮説

さて、以上に要約した大塚の「局地的市場圏」仮説は如何なる評価を受くべきものであるか？

この仮説が秀抜なのは、農民的商品生産や農村市場の局地的性を視座に据えているところにある。この場合、「局地」は単なる地域概念ではなく、半ば自立した農民の共同体を基盤とするヨーロッパ封建社会の構造的性質と関わらせて案出された本質的な地域経済概念である。本質的な地域経済概念とは、現実の経済生活空間を特定の社会構成体の歴史的特質に関わらせて抽象した結果、産み出されたものである。従って、それは経済生活空間の本質的(社会的歴史的)特徴づけであるといえよう。⁽¹⁰⁾例えば、ヴェーバーの「内陸」概念は、中世封建ヨーロッパ社会の経済生活空間を本質的に表現している。奴隷制という不自由労働の制度を土台とする古典古代と比較して、半ば自由な農奴労働と自由な手工業労働の制度を土台とするヨーロッパ中世の経済生活空間が、自由な賃労働とこれに基づく商品経済の全面的進展に特徴づけられる近代産業資本主義の起点となりうるということが、そこには含意されている。

大塚の「局地的市場圏」の場合には封建ヨーロッパ全体ではなく、その基本的な土台たる農村に視座を据え、そこでの商品経済の自生的展開こそが産業資本主義の起点であるとする点で、ヴェーバーの「内陸」概念をさらに極限化したものといえよう。しかもヴェーバーの「内陸文化」において重要な位置の与えられた中世都市は、大塚においては「局地的市場」に対立する存在とされており、「内陸」と「局地」についての両者の地域経済概念の質的な相違が読み取られねばならない。⁽¹¹⁾

注(5) N.S.B. Gras, The evolution of the english corn market from 12th to the 18th century, 1915, p. 32-64, 95 seq. 256 seq.

(6) ヴェー・イ・レーニン「いわゆる市場問題について」レーニン全集第1巻73-122頁。

(7) 大塚久雄「資本主義社会の形成」16頁。

(8) 同氏「資本主義発展の起点」41頁。

(9) 同氏「資本主義社会の形成」17頁の注を参照せよ。

(10) 本質論と実体論の規定については、拙稿「歴史科学方法論」経済学年報第4巻33頁以下、武谷三男「弁証法の諸問題」覆書房115頁、波多野精一「時と永遠」の全篇を参照せよ。

(11) 大塚は「資本主義社会の形成」17頁の注で、ヴェーバーについて「彼の理論が欲求充足の歴史的社会的形態という基礎観点から出発するためにはどこかのあいまいさを含んでいる……」という。確かに、ヴェーバーが「最少の局地的集落」the smallest local communities という場合、農村と都市の双方が含意されているようであり、「局地」概念と「内陸」概念との関係は連続的で、あいまいである。

ところで、かつて私が研究したエルベ河を挟むザクセン地方は、本質的な地域経済概念たる「局地的市場圏」仮説を検証するには恰好の素材を提供してくれる。⁽¹²⁾ 即ち、そこでは、エルベ河の東側に例の「農場領主制」が近世に支配的となる上ラウズィッツ地方があり、西側には同じ時期に「地代領主制」の支配的な地方が広がっていたのである。そして農民に不利なエルベ以東では農村内部から自生的に成立してくる市場町や農村都市の発生が、エルベ以西の後者（特にエルツ山地地帯）と比べ著しく立ち遅れていたことが、研究の結果はっきりしたのである。即ち前者では14世紀に微弱な発生波がみられるとはいえ、18、19世紀により強力な発生波が起きているのに対し、後者では13、14世紀（北西ザクセン）、15、16世紀（中部ザクセン）、14、15世紀（エルツ山地地帯）と地域により多少のずれを伴っているものの、いずれも中世後期から近世初期に最大の発生波が観察される。

またエルベ以東でも、農村共同体の存在様式や領主制との関わり様、そして農村内部での社会的分業の進展の度合と関係して、南部山地と中北部の平地で市場町、農村都市の発生に顕著な差異がみられるのである。⁽¹³⁾ 南部山地では、個々の農家経営の比較的高い森林フーへ村落という農地・集落の様式が支配的で、農場領主制の貫徹を或る程度チェックし、近世以降盛んとなった農村麻織物工業の発展により、集約的な局地的商品交換の場として市場町がうまれてくる。中北部の平地では、方形農地または三圃制農地で集村が支配的で、しかも大規模の「領主農場」が多数存在し、「農場領主制」がより強く貫徹した。しかも、社会的分業の点では主穀生産一本のモノカルチャーで、領主の商品経

済が農民の商品経済を圧倒し、18、19世紀に発生する市場町も大規模農場を持つ領主経済の拠点なのであった。

以上のような対照は、封建社会構造の著しく異なるドイツとイギリスについても確認しうるところである。

一方のドイツでは、13世紀から14世紀に頂点に達する中世都市の発生波と踵を接しつつ14、15、16世紀にかけて自生的な市場町、小都市の発生波が起きているが、エルベ以東ではこの波も微弱であった。⁽¹⁴⁾

他方のイギリスでは、中世都市の大量発生期が12、13世紀、自生的な農村市場町のそれが13世紀に既に頂点に達している。⁽¹⁵⁾

この対照の背後に、両国の封建社会の構造的特質及びその歴史的推移、その下での都市と農村の相互関係、社会的分業の展開の仕方等における両国の対照を読み取ることは、さして困難ではない。形骸化した神聖ローマ帝国体制の下で王権が衰微し、大小の封建領主権力の無政府状態が出現し、この権力闘争の一環として都市建設が激しく行われたドイツ、また農村共同体が三圃農法と集村形態を採用することが多く、このため封建諸侯の家産の支配がより有効であったドイツ、ここでは農村内部の自生的な社会的分業は、イギリスより遙かに遅れ、しかも中世都市のより大きな影に覆われつつ展開したのである。反対に、征服封建制で出発し、その後も王権がその強大さを誇り、中間貴族の専横を制限し、従って中世都市も特権的な性格が弱く、量的にも厳しく制限されていたイギリス、また農村共同体が三圃農法と集村形態以外の穀草農法、小村乃至散村形態を取ることが多く、封建的家産の支配が未成熟であったイギリス、ここでは農村内部の自生的な社

注(12) 拙稿「近世初頭中部ドイツの農村都市、市場町について」三田学会雑誌第56巻第3、8、10号。なおこの論文は要約して英文で発表され、東ドイツの Karlheinz Blaschke 及び西ドイツの Carl Haase の評価を得ている。Rural small towns and market-towns of Sachsen, Central Germany, at the beginning of the modern age, in: Keio Economic Studies, vol. 2, 1964, p. 51-89.

(13) 拙稿「エルベ以東・上ラウズィッツ地方の農村市場町」三田学会雑誌第58巻4、8号。

(14) 前掲拙稿「近世初頭……」、 「エルベ以東……」及び英文論文を参照。その他 Werner Spieß, Das Marktprivileg. Die Entwicklung von Marktprivileg und Marktrecht insbesondere auf Grund der Kaiserurkunden, 1916; Otto Kielmeyer, Dorfbefreiung auf deutschem Sprachgebiet, Diss. Bonn, 1931; Heinz Stoob, Kartographische Möglichkeit zur Darstellung der Stadtentstehung in Mitteleuropa, besonders zwischen 1450-1800, in: Historische Raumforschung, Bd. 1, 1956, S. 21 ff.; Derselbe, Minderstädte. Formen der Stadtentstehung im Spätmittelalter, in: Vierteljahrschrift für Sozial- und Wirtschaftsgeschichte, Bd. 46, 1959, S. 1-23; C. Haase, Die Entstehung der westfälischen Städte, 2. Aufl. 1964. を参照せよ。

(15) 安元稔「イングランドの中世都市」三田学会雑誌第64巻8号、米川伸一「中世イギリスにおける『農村市場』の成立」社会経済史学22号の3、J. Tait, Medieval English Borough—Studies on its Origins and Constitutional History, repr. 1968; Alan Everit, The Marketing of Agricultural Produce, in: The Agrarian History of England and Wales 1500-1640, ed. by H.P.R. Finberg, Bd. 4, 1967, p. 466-477.

会的分業と商品経済の展開はドイツより早く、しかも中世都市に対する優位を確立して行くこととなるのである。⁽¹⁶⁾

以上の比較史的検討によれば、大塚の「局地的市場」仮説は近代資本主義商品経済の場所的起点を農村内部に求めるという意味で基本的に正しい本質理解を含んでいるといえる。だが、その概念作成に当っての前提となる封建社会の構造的性質の理解、概念そのものの方法的位置づけの2点において重大な欠陥がある結果、その「局地的市場」仮説は著しく一面的な性格を帯び、史実の検証に十分耐えることが出来ない。

彼によれば、封建社会とは生産者の水平的な共同組織、即ち成員の自立性が高い地縁的共同体と、この土台の上に経済外的強制によって成立する封建的土地所有者(領主)の階級から成り立っているという。⁽¹⁷⁾ 封建的支配を経済外強制から説明する仕方は、マルクスに由来するものであるが、土地所有の近代的形態(経済的独占)との機械的類推のため、経済主義、客観主義の一面性に陥ってしまう。封建的支配は、個別経営(経済的権力)が共同体の関係によって己の未成熟を補強している段階で、封建領主が個別経営に共同体の枠内での自立性を保証することにより成立するものである。経済外強制とは、かかる保証=保護が領主の司法、軍事等共同社会に関する経済外的諸活動に主に基づくものであり、これにより自己の経営の持続的安定を図るといふ目的で、封建的農民が選ぶ支配への服従の現象形態に過ぎぬ。⁽¹⁸⁾ そして、農民、手工業者の水平の(いわゆる社会的)分業は、領主と農民若しくはその共同体

との縦の(垂直的)分業と支配の関係という縦糸の中で織り成される横糸なのである。ヴェーバーの「内陸文化」概念がすぐれているのは、あの「支配の社会学」に窺われる分業と支配へのかかる体系的理解による所が大きい。⁽¹⁹⁾

ところが、大塚の「局地」概念は、領主と農民の商品経済における対抗というコスミンスキーの仮説に同意しつつも、これを上述のような社会史的、政治史的な展望の下に置くことなく、農民の共同体を孤立して扱うという形で、抽象されるのである。これが、生産者6人の単一共同体モデルで資本主義的国内市場を論証しようとしたレーニンに、大塚が傾斜して行く所以である。確かにレーニンの構想には、農民層の分解が社会的分業と並行して進む時には、資本主義的国内市場の形成をもたらすという、それ自身正しい命題が含まれている。しかし、産業資本主義の起点としての農村共同体は、封建的支配という縦糸を含む封建的社会空間の中に存在しているのであって、それだけが孤立して自然発生的な自己解体を起して行く訳ではない。つまり、レーニンは農村共同体が分解し、資本主義的商品経済が進展して行く上で必要な条件は示しても、封建的社会空間の全面崩壊という歴史的前提の成熟、つまり十分条件の方には全く無関心である。それは共同体内分業の展開を生産力の自然成長的發展の結果に帰する神秘的な客観主義、経済主義的な歴史解釈以外の何物でもなく、この点大塚の「局地的市場圏」仮説も同様の欠陥を共有することとなる。⁽²⁰⁾ 封建領主制やその権力構造、これと農民との主観的、客観的な関係、

注(16) ドイツ経済史において「都市経済」*Stadtwirtschaft* が占める不動の地位に当てはまる表現をイギリス経済史は持たない。イヴリットはイギリスについて「農村地帯へと富が還流したので、大陸の都市の場合のような厳格な自治都市のヒエラルキーは成立しなかったものの、市場町の市民社会的諸関係は相当にしっかりした、持続性に富んだものであった。」という。A. Everit, op. cit., p. 489. また、最近のドイツにおいて、中世都市と農村の中間に存在する都市的定住に「半都市」*Minderstadt* の名称が与えられているのも、ドイツにおける「都市」の農村に対する優位を示している。ヴェーバーが「内陸」と「局地」を連続してとらえ、後者の中に都市も含めようとしたあいまいさもここから理解すべきであろう。H. Stob, *Kartographische Möglichkeit*……, S. 21 f., 41; id. *Minderstädte*……, S. 23 f.

(17) 大塚久雄「共同体の基礎理論」38頁、同氏「資本主義社会の形成」8頁。

(18) Marc Bloch, *La société féodale*, 1939-40. English translation, *Feudal Society*, 1961; R. Coulborn, *Feudalism in History*, 1956; Otto Brunner, *Land and Herrschaft. Grundfrage der territorialen Verfassungsgeschichte Süddeutschlands im Mittelalter*, 3 Aufl. 1943; Helmut Kämpfe (Herausgeber) *Herrschaft und Staat im Mittelalter*, 1960. なお高村象平、小松芳喬監修「西洋経済史」第1部も参照。

(19) M. Weber, *Wirtschaft und Gesellschaft*, passidem.

(20) この欠陥が端的に表われたのは、レーニンの「ロシアにおける資本主義の発達」と大塚の「共同体の基礎理論」である。後者がヴェーバーからの引用によって部分的にほかされているとはいえ、両者は歴史の発展を生産力の自然成長的な展開に帰している点、また世界史を単系列の発展段階で把える点で、極めて一面的な史的唯物論の立場に立っている。大塚の場合、ヴェーバーとの接触も含めて、実践論、分業論にそうした一面性からはみ出る実践的歴史把握があるのであるが、その分業論を専ら水平的社会分業に限定し、唯物論の呪縛に自ら入りこむ。かつて筆者は、分業論の縦の側面、

これらの要因と密接な関連をもって成立し、「局地的市場」の重大な歴史的な前提を成す中世的な都市と農村の関係等が、両者の分析で有機的なつながりを持つ総体として扱われることが少ないのはこのためである。

両者に共通なのは、人間社会史に関する一面的理解に留まらない。現実からの抽象(下向)と抽象の結果得られた「理念型」による現実の加工(上向)という社会認識の方法に関しても、平板的、直線的な把握の段階に留まっている。大塚はいう、「……この共同体内の分業という概念は直接には理論的に構想されたものであるから、史実の実証に即して事態の核心に迫って行こうとする歴史学においてはもう少し幅をもたせて、むしろ『局地内分業』というふうに表現した方がよいかと思う。」そしてこの分業は「農村共同体内部の農民たちの間に形成される社会的分業」であり、事実上は初めから多少とも一共同体よりは広い地域をその圏内に巻き込み、「局地的市場圏」(local market area)⁽²¹⁾という姿で現われてくる。

そこには単一の共同体と複数の共同体が、それぞれ理論(本質)と現実の次元で問題となりうるという想定がある。現実そのものと、そこへの接近の中間項である実体的な仮説の区別については後にふれるとして、ここでは本質論的な仮説が実体としての単一の共同体と対応するものかどうかという一点に限定して問題を検討してみよう。本来、本質的な地域経済概念としての「局地」の意味するのは、封建領主制社会における農村共同体一般の内部であり、これに実体的に対応しているのは単一の共同体ではなく、複数の共同体なのである。従って、大塚のように、理論から現実へ接近する際に、「幅を持たせて」単一共同体を複数共同体

に拡張する必要は豪もない。封建領主制社会における農村共同体は複数の形で存在して居り、そのいずれにおいても局地的な社会的分業や商品交換が展開していくというのが、「局地的」分業や市場の本質規定の意味なのである。

この点で注目しに値するのは、ヴェーバーの「最少の局地的集落内部及びその相互の間の財の交換」(the exchange of goods within and between the smallest local communities)という表現である。そこでは複数の「最少の局地的集落」が前提とされ、しかもその「内部及びその相互の間」の交換という形で、局地的な商品交換の集約性が表現されている。これは「農場領主制」と「地代領主制」という対照的な封建制の下にあった東西ドイツの市場構造を比較した際、ヴェーバーが西ドイツの「集約的な局地商業」(an intensive local trade)⁽²²⁾について使用したものである。この場合、「最少の局地集落」には農村のみならず、都市も含まれ、その「局地」概念が彼の「内陸文化」の最も集約的な型という性格を持っている点で、大塚のいうようにあいまいさが残り、大塚の「局地」=農村共同体内の本質規定の方が「理念型」としてはより純粋である。だが、その大塚がその本質規定に実体としての単一の共同体を対応させてしまうのに対し、ヴェーバーは「共同体内及び共同体間」という形で、複数の共同体間の分業と商品交換が適格に表現されているという意味で、大塚の仮説より遙かにすぐれている。かつて私の採用した「局地内及び局地間」分業及び交換という表現も、大塚の「局地」概念とヴェーバーの「共同体内及び共同体間」概念とを結合して作成したものである。⁽²³⁾

即ち指揮、管理、計画と執行の間の分業をマルクス、ヴェーバーを参照しつつ理論化した(1962年に執筆の未発表の手稿「史的唯物論の再検討」)、それは人間の社会的実践を単なる自然発生的なものとしてみず、目的意識性と自然発生性の合成物とみることから出発したものである。そして分業と支配の縦の関係こそ、夫々の歴史的に特殊な自然発生性という制約の下での社会的目的意識を実現していく手段なのである。この点で、マルクスは「精神労働」と「肉体労働」の分業と「指揮」と「執行」の分業の区別が明確でない点、ヴェーバーの後塵を拝さざるをえない。だが、支配の本質を所有ではなく、分業に求めたのは正しいとはいえ、その上で分業と所有に関する実体的な理論が未完成である。いずれこの完成を待って分業論的支配の体系を発表することにしたい。なおこの点での卓抜な理論の要約は、M. Weber, *Wirtschaftsgeschichte*, S. 8-14.にある。そこでは分業と所有の内的な絡み合いが見事に整理されている。

注(21) 大塚久雄「資本主義社会の形成」16頁。

(22) 注(2)で既に紹介したこの論文は、元来ヴェーバーがアメリカ訪問の折にルイジアナで行ったドイツ語の講演の記録である。最初その英訳が Charles W. Seidenadel により Congress of Arts and Science, Universal Exposition St. Louis, 1904, vol. 7, p. 725-746 に The Relation of the rural community to other branches of sozial science という表題で公開された。その後前掲の英文及び独文の形で公開された。

(23) 前掲拙稿「近世初頭中部ドイツ……」,「エルベ以东・上ラウズイッツ……」の随所。なお英文論文ではヴェーバーの the smallest local communities という表現に代って, the rural villages を「局地」の訳とした。

大塚が「共同体間」交換で問題にするのは、主に遠隔地間の交換である中世都市の商品経済であって、これに対抗する農村内部の商品経済は、理論モデルの次元ではレーニンに倣って単一の共同体内部のそれとして把握され、その後現実接近の過程で複数の共同体に拡張して「局地的市場圏」が想定されるものの、基調はあくまで共同体内部にあり、複数の共同体同士の関係やそれにより規定される市場構造の問題は等閑に付されてしまう。この欠陥は彼が「局地的」概念を本質的な地域概念として十分自覚的に抽象出来なかったことに由来している。本質的な地域概念としての「局地的」は、最も抽象度の高い次元では封建的農村共同体内部一般という普遍性を獲得するが、本質的な地域概念の枠内で始まる上向の過程ですでに狭義の意味の「局地的内及び局地的間」という一つの地域構造が与えられなくてはならないのである。

3. 実体的地域経済概念としての「局地的市場圏」仮説

既に引用したように、大塚は理論から史実へ接近するために、「共同体内」という言葉に幅を持たせて複数の共同体を含む地域を「局地的」と名付け、その内部での分業を、「比較的農業的色彩の濃い村々に取り巻かれた小規模な商工業の中心地、そうした両種の諸村落の組み合わせの中で多少とも自給自足的に展開される社会的分業」だ⁽²⁴⁾という。そして、これに基づく局地的内の商品経済圏を「局地的市場圏」と名付け、その内部での自然成長的な分業と商品交換の展開は次第により広範囲の「地域的市場圏」から「国内市場圏」へと発展して行く⁽²⁵⁾。

このように、複数の共同体の間に、中心的村落と周辺村落という円形に分業＝市場構造が想定されているものの、大塚の「局地的市場圏」は、自給自足を原則とする閉鎖的地域経済圏である。そして産業資本主義への道は、その内部における分業と市場の自然成長的發展によってのみ拓かれるという。新歴史学派の巨匠ビュッヒャアの「都市経済」概念に似た大塚仮説のこの閉鎖性は、本質的地域概念と実体的地域概念を方法的に明確に区別しないことの必然的帰結である。本質的な地域概念として「局地的」概念を十分吟味すれば、そこで既に複数の共同体が抽象的な形で問題にしうることは、前節で考察した通りである。ところで、実体的な地域経済概念とは、本質的な地域経済概念をふまえた上で、空間的な広がりを持つ大地(自然)との実体的関係で表現される経済生活空間のことである。そこで課題となるのは、大塚のように単純な閉鎖的自足性そのものに関心を向けるのではなく、何故同じ封建的農村内部でありながら、特定の村落が商工業の中心となり、他の村落がその周辺村落としての位置におかれるのか、そしてその相互の関係つまり「市場圏」の構造はどのような性格をもつか等の問題を解明することである。というのは、実体的地域経済で問題なのは、大塚のように理論面での単一の共同体に幅を持たせて、複数の共同体へと拡張することではなく、一定の数の共同体が一つの核を持つ分業＝市場圏を形成する事実だからである。

この点で興味深いのは、経済地理学者クリスターアが周辺農村の中核となる集落を「核地集落」(der zentrale Ort)⁽²⁶⁾と名付けていることである。彼は、都市の主要職務は「その周辺農村の中心点であり、局地的交換を外界に媒介する者たること」にありとした恩師

注(24) 大塚久雄「資本主義発展の起点における市場構造」33頁。

(25) 同論文42頁以下、同氏「近代化の歴史的起点」81頁以下、同氏「リーランド……」全篇。

(26) Walter Christaller, Die zentralen Orte in Süddeutschland. Eine ökonomische-geographische Untersuchung über die Gesetzmäßigkeit der Verbreitung und Entwicklung der Siedlungen mit städtischen Funktionen, 1933, Reprographischer Nachdruck der 1. Aufl. 1933. クリスターアのこのモノグラフが都市地理学の標準としての地位を確立しており、1966年には英訳 The central places in Southern Germany, が出版されている。この本の初版から今日までの都市地理学の発達については Peter Schöller, (Herausgeber), Allgemeine Stadtgeographie, Wege der Forschung, Bd. 181, 1969 をみよ。なお、同じ Schöller の Die rheinisch-westfälische Grenze zwischen Ruhr und Ebbengebirge, 1953 はクリスターアの「核地集落」仮説に基づく実証研究の代表的なものである。このシュエラアの研究内容は、拙稿「『地域的経済圏』の比較的研究—ライン・ヴェストファーレン地方史研究の動向—」土地制度史学40号に紹介してある。なお日本での都市地理学と歴史研究の協働は未だ数少ないが、差し当り矢守一彦「都市プランの研究—変容形成と空間構成—」と黒崎千晴「地方的中小市場の商圏に関する一考察—明治初期善光寺平東部の各市場の集荷圏を中心として—」新地理第5巻4号、同氏「東西大商圏とその変貌—明治前期における米の流通を中心として—」日本歴史地理学研究会紀要6号をあげておく。

グラートマンの定義をもっと普遍化して、⁽²⁷⁾「或る地域の核地」の核(中心)性を問題としたのである。かつて、⁽²⁸⁾エルベ東西の境界地域ザクセンに関する研究で私が使用した「局地内・間分業」(乃至商業)なる概念も、本質的な地域概念の枠内に位置づけ、その上でより実体的な地域空間に関して、「核地共同体内部及び核地共同体と局地共同体の間」という表現が用いられるべきであった。これを簡略にすると、「核地内及び核・局地間」の分業=市場構造となる。

以下、「局地市場圏」の核地集落が如何なる条件の下で特定の地点に生成・発展するのであるか、またこの種の中心点を持つ分業=市場圏の内外関係はどのような性格を持つと理解されるべきであるか、の2点について略述してみよう。

第1の核地集落形成の条件について、先ず考慮されるのは自然条件である。ヴェーバーは、西ドイツの集約的局地的商品交換の基礎として、平野、谷間、高地が混在し、気候その他の自然に関する生産諸条件が地域内で多様であることを指摘している。⁽²⁹⁾史実によれば、こうした多様な立地の接点に核地集落の形成がよくみられる。「谷間集落」(Talsiedlung)といわれる市場町や平野(穀草地帯)と山地(農村工業地帯)の接点に発生する穀物市場町がその例である。また中世後期以来、

工業面での水力利用が盛んになるにつれ、水車小屋建設に有利な水流の激しい山地地帯の小河川の存在は、核地集落のもっと直接的な自然の基礎であった。

こうした自然の条件が、それだけで核地集落やそれを中心とする局地的分業=市場圏を形成して行くわけではない。クリスターアは、或る地域の自然条件(地味や天然資源)は、核地集落の発展に直接の影響はなく、人口密度や所得分布等に規定的な作用を及ぼす限りでその影響を観察しようとしている。⁽³¹⁾基本的には、封建領主制社会における人間の側の主体的条件が、自然との新たな自然との結合を必然たらしめる時に、これらの自然条件が活きるのだといえよう。それではその主体的条件とは一体どのようなものか。

第1に封建領主制社会の下部構造である農村共同体がどのような農業方法、どのような定住形態を取るかが問題である。具体的には穀草農法孤立農家(散村)または小村、三圃農法と集村、森林フーヘ村等様々の組み合わせが存在する。それは共同体集落の生活空間に特定の形式を与え、共同体内及び共同体間(局地内・間)の経済関係に重大な影響を及ぼす。クリスターアによれば、散村では食パンや肉等の日用必需品が分散して造られ、消費され、その種の商品の生産が集中して核地集落が形成されることはないという。但し、

注(27) Robert Gradmann, Schwäbische Städte, in: Zeitschrift der Gesellschaft für Erdkunde, 1910, S. 427. ここでは W. Christaller, a.a.O., S. 23. より引用。なお、グラートマンの Die Städtischen Siedlungen des Königreichs Württemberg, Forschungen zur deutschen Landes- und Volkskunde, Bd. 21, Heft 2, 1913; Süddeutschland, 2 Bde, 1933. については、拙稿「西南ドイツの局地市場—ロベルト・グラッドマンの所論を中心に—」三田学会雑誌第55巻10号及び「ドイツにおける中世後期の農村都市研究動向」社会経済史学第29巻2号で詳しく紹介してある。

(28) W. Christaller, a.a.O., S. 33 f. グラートマンの経済地理学が歴史的考察を前提としているのに対し、クリスターアはそうしたグラートマンの分析をふまえて、20世紀初頭の時点における南ドイツの核地集落を考察対象としている。だが、基礎概念、静態的観察と動態的観察による都市地理学の経済的基礎理論、それを適用しての南ドイツの分析という総合的体系のモノグラフは、都市のみならず、市場町や村でも核性を有するものはこれを取り上げ、しかも歴史的な視点も随時入れられておる等、歴史学の立場からも興味深い示唆に溢れている。なお、基礎理論に際しては、人口の分布・密度、所得構造、核商品、核地集落を中心とする地域、交通、核商品の到達範囲、核地集落体系が問題とされている。

(29) M. Weber, op. cit., p. 378-379.

(30) 谷間集落については、R. Gradmann, Die städtischen Siedlungen—, S. 159-164; id., Süddeutschland, Bd. 1, S. 160-164. を見よ。なお穀草地帯(平野)と農村工業地帯(山地)の接点での市場集落の発生については、ヴェストフアレン南部のヘルヴェーク地方が良い例証を提供する。その北には主穀生産地のミュンスタア地方が広がり、その南にはザウアーラントの農村工業地帯があり、ルール河沿いにヴェッタア、ヘルデッケ、ウンナ、ゾースト等の穀物市場が開設された。このうち、ヴィッテン、ヴェッタア、ヘルデッケは市場町であり、特に後者は農村からの自主的発展が確認される。なお、ヘルデッケの穀物市場については、Willy Reinert, Der Kornmarkt von Herdecke a.d. Ruhr, Münster Phil. Diss. 1920. を見よ。なお穀物市場町ヘルデッケと針金市場町を価格関係も含め比較経済史的にとらえたものとして Makoto Terao, Minderstadt in historischer Sicht—Die Entwicklungslinie der Freiheit Altena, in: Wirtschaftliche und soziale Strukturen im säkularen Wandel, Festschrift für W. Abel zum 70. Geburtstag, 1974. をあげておく。

(31) W. Christaller, a.a.O., S. 50 f.

(32) Ibid., S. 37 f.

「局地的市場」仮説の方法的検討

そこでは住民の所得水準は高く、高次の核商品を誘引
力とする核地集落が比較的少ない数で、成立する。こ
れに対し、集村の方は、村々の中でも比較的多数の村が、
パンや食肉等日用必需品を含む低次の核商品でもって
核地集落となる。彼の対照は封建時代についてのもの
ではないが、最近のイギリス農業史の一成果によれば、
イングランド北部の市場町の市場圏が他の地方より広
範囲であるのは、粗放的な沼沢地と密接な関連を有す
るとい⁽³³⁾う。ヘプケが北ドイツのフリースラントを、
経済的中心があくまで農村内部にあって、都市形成が
弱い地域の例証としたことも、この地域の穀草農法と
散村形態を考え合わせると、注目⁽³⁴⁾に値する。要
するに、共同体成員の自立性が比較的高い散村地帯で
は、核地集落の形成が弱く、農村内部の分業及び市場
圏という意味で、「局地内・間」の関係が顕著であっ
たとみて差し支えなからう。

さて、核地集落形成の第2の条件は、社会的分業の

展開である。この条件と結合した時に始めて自然条件
は効力を発揮する。比較的狭い地域の内部に自然の多
様な条件が与えられていて、しかも住民の社会的欲望
が成長し、これの充足に必要な社会的分業が発展する
場合には、それぞれの地域なりその部分々に特化産
業が成立する。亜麻または大麻の栽培に適した風土が
あれば、麻糸は麻布の製造が、鉄鉱石その他の鉱物資
源に恵まれていれば、金属工業が、牧羊業にふさわし
い自然条件があれば、羊毛の生産乃至は毛織物の製造
が発展するといった具合となる。こうした現象が狭い
地域の内部でみられればみられるだけ、それらの社会
的分業はその地域の特化産業として、それを軸(中核)
とする経済圏がうまれてくる。これまで筆者の扱った
ドイツの事例でも、また最近のイギリス史の成果に照
らしても、農村市場町や農村都市が、その地域の特化
産業の中心地⁽³⁵⁾、その市場開催地であったことが確認さ
るのである。2種類以上の特化産業が1地域内に混在

注(33) A. Everit, op. cit., p. 496-502, 532-543. 同所に載る市場町の市場距離の表を挙げておく。

市場からの距離	週 市					
	北 部	南 部	東 部	中 部	西 部	全国平均
1 ~ 5 1/2 M.	17	31	60	36	25	39
6 ~ 9 1/2 M.	13	38	25	14	35	26
10 ~ 19 1/2 M.	20	31	13	29	25	20
20 M. 以上	50	0	2	21	15	15

市場からの距離	歳 市											
	S.	B.	S.	B.	S.	B.	S.	B.	S.	B.	S.	B.
10 M. 以下	37	28	36	66	22	26	11	14			33	38
10 ~ 29 M.	27	28	9	34	34	26	29	38			24	30
30 ~ 74 M.	18	22	0	0	15	35	42	30			19	20
75 M. 以上	18	22	55	0	29	13	18	19			23	11

M.=miles S.=sellers B.=buyers

イヴリットは、週市について地域比較を行った箇所以下のようにいう。即ち中部、西部、取りわけ北部における週市訪問者の到達距離は、東部、南部に対し大きいことを指摘、その理由として北部においては粗放的な沼沢地によって離れ離れになった市場町の数が比較的少ないことを、農産物特化の進展が強いことと共に挙げている。なお、歳市の地域比較の所で、彼は人口密度の大きく、開放耕地の村々の多い中部地方では、局地的需要や他地域の為の金利は少ないとし、この地方の歳市の遠距離なのは、大農場産の家畜が南北東西イングランド向けに取り引きされていた結果だという。

注(34) Rudolf Häpke, Die ökonomische Landschaft und die Gruppenstadt in der älteren Wirtschaftsgebiete, im: Sozial- und Wirtschaftsgeschichte, Gedächtnisschrift für Georg von Below, 1928, S. 82-104.

(35) 中部ドイツのザクセン地方における麻織物工業、鉄工業、ライン・ヴェストファーレン地方の麻織物工業、鉄工業等が想起されるが、同時にヘルデッケのような主穀を特化の中軸商品とする市場も忘れてはならない。イヴリットの研究によれば近世初頭のイギリスでは、東部の200の市場町の内77が、中部では160の内80が、西部では170の内55が、北部では124の半数以上が、ウェイルズでは60の内23が特化商品の市場を有していた。総数約800の内300の特化市場の内分は、133が穀物、92が牛、32が羊、30以上が羊毛と糸糸、同じく30以上が魚介類、27以上が布地、26が麦芽、21が鴉鳥と家畜、14が豚、13が馬、12がバターとチーズ、11が皮革またはその製品、8が亜麻布、6以上が果実、4が大麻の特化市場であった。この種の特化産業をアレクサンダースン Gunnar Alexanderson は「都市形成力をもつ生産」City Forming Production として、「都市へのサーヴィスを提供する生産」City Serving Production と区別して

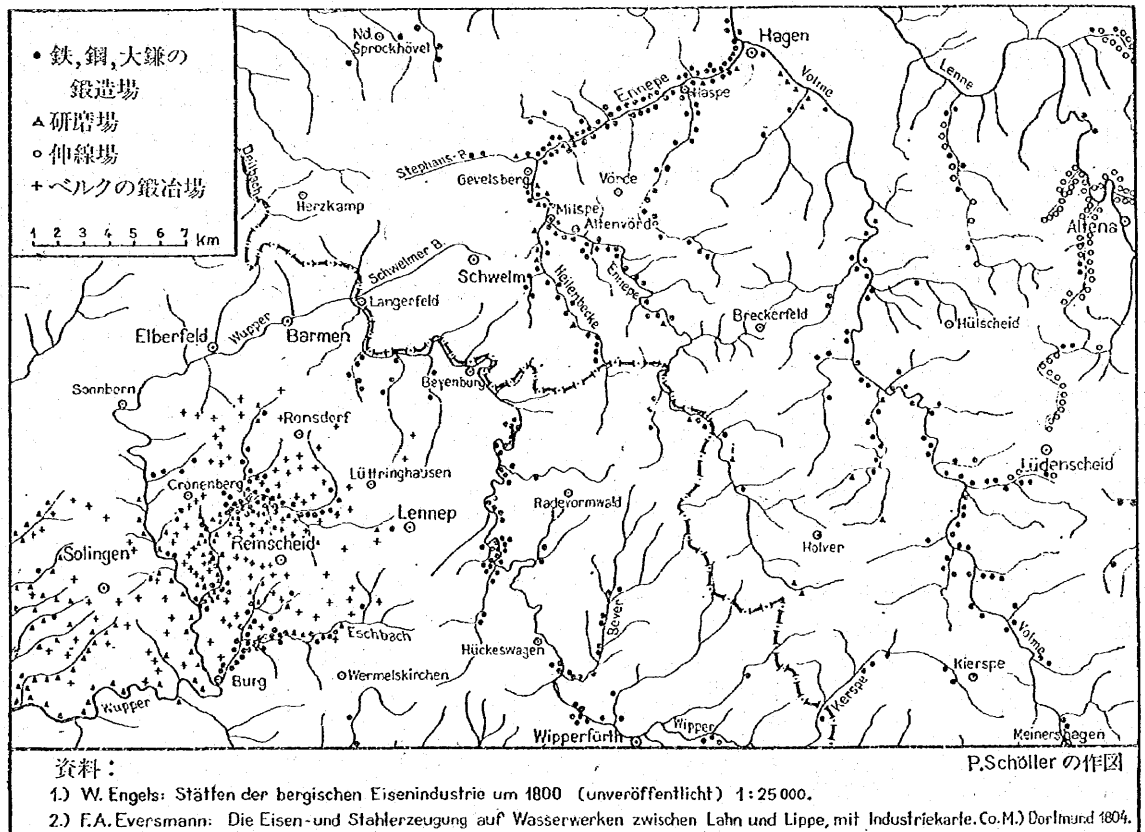
「局地的市場」仮説の方法的検討

すると、地域経済圏の分業＝市場構造は自足的性格を強めるとはいえ、特化産業が軸となる以上、核地集落は周辺農村地帯を含めた「局地」的市場圏同士の分業、つまり広義の局地間（或いは核地間）分業の中心地として発展することになるのである。

さて、こうした特化産業による地域経済圏形成の中で、特定の村落が核地集落として登場してくるには、

特化産業内部での最終加工工程の集中現象が決定的に重要である。それは一産業部門内での工程別分業の特化であって、産業資本主義以前の時代における工業の地域的集積現象といえよう。周辺の農村で生産された原料または半製品を集中的に加工する「生産志向型」の核地集落には、加工設備集中が前提となる。具体的には、鉱山業における採掘と製練、金属工業における

図1 1800年頃のゾーリングゲンとアルテナの間のベルク・マルク地方の鉄工業の立地



いる。なおクリスターラアの核商品 die zentralen Güter はこうした区別を設けず、前者を高次、後者を低次の核商品としているが、局地間の基軸産業が、局地市場の形成力となるという意味で、アレクサンダースンのように、局地内の消費向けの産業と区別するべきであろう。大塚の「局地内分業・市場」の場合には、この区別が不明確であり、これも、局地内市場の自給自足性がアブリアリに持ち出される理由となっている。G. Alexanderson, City Forming and City Serving Production, in: Allgemeine Stadtgeographie, S. 310-321, W. Christaller, a.a.O., S. 28.

注(36) 完全な自足性を云々するには、十指に余る産業が地域内に存在しなくてはならぬであろうが、取り分け鉄と繊維と主穀と家畜が大きな柱となる。イングランド西北部の市場町 Stourbridge は家畜を始め、羊毛、ホップスと共に、鉄製品（中部地方西部）、刃物類（北部のシェフィールド）、合金器物（ロンドン）、ガラス（北部のノッティンガム）、に加え、工業用の回転砥石、荷鞍、矢来、荷車の輻、釘、シャベル、籠、薬罐、木製のバスケット、手桶、ジャッキ、フライパン、羽ぶとんが取引されているが、より広い局地（核地）間の交換が中心の重要な歳市であった。Everit, op. cit., p. 536 seq.

(37) 産業資本主義時代の工業の地域的集積が経営内分業の全面展開に伴う資本の集積集中を基礎とした立体的（垂直と平面の統一）なものであるのに対し、産業革命以前のそれは、技術と社会経済の両面で経営内分業が未熟な段階に留まるために、特化産業の局地的集中（特にその混在）と加工部門の局地的集中のような平面的集積に留まる。

精練、鍛造、研磨、伸線等のための水力作業場、繊維工業における漂白や縮絨のための水力作業場であるが、それらは小河川の合流点、鉱山資源や燃料である木炭の補給基地である森林地帯等幾つかの自然条件が地域的に集中している場所で実現可能となるのである。もし、これらの自然の条件から原料が周辺の農村地帯から来るのではなく、距離を置いた地域から提供されるとすると、原料乃至半製品生産と完製品生産の分業は局地地域内のそれとしてではなく、遠隔の核地集落同士（或いは局地地域間）のそれとして展開される。これにより、中世都市の隔地間分業＝市場と同様の性格が農村内部から自生的に成長してくる新しい核地集落に与えられることとなる。私の研究した北西ドイツ・ヴェストファーレンの伝統的鉄工業地帯の針金工業町アルテナやその近隣の諸都市は、その例であろう。ここでは工程別の分業が核地集落別に行われ、その中には市場町アルテナと並び中世都市リュエデンシャイトやイザローンが登場してくるのである（図1）。

これに対し、一地域内部で原料・半製品と完製品の生産特化と交換が行われる場合には、工程別の分業＝市場関係として新しい再生産圏が形成されるといえるし、特に特化産業の重なり合い（工業化以前の時代の平面的集積）が起った場合には、新傾向には拍車がかかけられるのである。だが、その場合でも、局地的分業＝市場関係は、核地集落内部（狭義の局地内）のそれ以上に核地集落と周辺局地集落とのそれであって、局地間の性格を帯びるのである。そして周辺農村に対する際立ちが目立てば目立つ程、新しい核地集落は中世都市的な性格を持つことになる。

さて、核地集落形成の第3の条件は、商業的機能の特定集落への局地的集中である。この場合、商業は核地集落形成の中核的役割を担う意味で、「核用役」(die zentralen Dienste)⁽⁴⁰⁾ だといえよう。そしてその用役は、

核地集落と周辺村落や核地集落同士の分業体制を円滑ならしめるための商取引であって、これに役立つ交通の便が考慮に入れられる。グラートマンはエルンストを引用しつつ、ヴェルテムベルク中世後期の交通路がそれ以前の遠隔地商業に役立つ道路から、小都市から小都市、村から村へとつながる道路に移った事実をあげている⁽⁴¹⁾。また、例の谷間集落を始め、こうした市場的機能が果せる条件を揃えた場所には核地集落が成立するのであって、農村工業の中心地が自生的な農村そのもので必ずしもないのも、そこから説明される。ヴェストファーレンの針金工業町アルテナの場合も、水力作業場の凝集点を包摂している一方、城下町としてのフライハイトが、針金製品を集積し、外部へ販売する拠点であった⁽⁴²⁾。同様のことはライン寄りのヴッパー溪谷地方でも、金属工業の中心たるゾーリンゲンや繊維工業の中心エルバーフェルト・バルメンについても確認出来る⁽⁴³⁾。前者は同じような数個の刃物工業集落の市場中心地として、後者ではエルバーフェルトが農村工業集落バルメンの市場中心地として現われた。

かかる「核用役」としての商業的機能は、核地集落と周辺村落の産業部門内分業体制を媒介するという新しさを持つと共に、そうした分業が遠隔の核地集落同士や核地集落と中世都市との間のものであったり、製品の販路が遠隔地である場合には、中世都市と同様の古さ、つまり生産に対する優位性を持つ。そして、共同体間の商取引が大きな比重を占めている以上、前者の新しさも産業資本主義時代の商品交換に直線的につながって理解されてはならないのである。特に、核地集落が周辺の村落に対して「週市」開催の特権を行使できるようにすることは、かかる古さとの連続を表現するものであり、日用必需品生産及び販売のみならず、農村工業の生産物の販売も核地集落へ集中することを

注(38) これについては、拙稿「針金工業町アルテナーその発生史的研究」三田学会雑誌第64巻8号及び Ferdinand Schmidt, *Das Eisengewerbe im Süderland bis zur Stapelzeit (1744)*, 3 Bde, 1949. を見よ。なお図1は Peter Schöller, *Die Bedeutung einer alten Territorialgrenze für die heutige Verflochtenheit des Bergisch-Märkischen Industriegebiets*, in: Petermanns Geographischen Mitteilungen. 97 Jg. Heft 3, Tafel 2.

(39) 拙稿「近世初頭中部ドイツの農村都市、市場町について」(三), 三田学会雑誌第56巻10号。

(40) W. Christaller, a.a.O., S. 29.

(41) Viktor Ernst, *Beschreibung des Oberamts Münsingen*, S. 339 ff.; R. Gradmann, *Die städtischen Siedlungen*, S. 154. なおイヴリットも交通、特に河川の利用し易い場所に市場町が成立し易いとしている。A. Everit, op. cit., p. 479, 492, 495.

(42) 拙稿「針金工業町アルテナ」を見よ。

(43) Erich Keyser (Herausgeber), *Rheinisches Städtebuch, Deutsches Städtebuch Bd. 3/3*, S. 379-387.

(44) 差し当り P. Schöller, a.a.O., S. 77-80. を参照せよ。

意味するのである。⁽⁴⁵⁾

最後に、先に提出した「局地的市場圏」の内部構造を考察して終ろう。

第1に問題となるのは、実体的な地域経済圏としての「局地的市場圏」仮説の閉鎖性である。大塚の場合には中心の商工業村落と周辺の農業的村落という円環の市場構造が自給自足性を多少とも持つという形で、閉鎖性が想定されている。このような閉鎖的な円環市場構造は、ビュッヒャアが中世都市について提示したものに酷似している。⁽⁴⁶⁾ だが、ペロウは地方の有力都市のメッセを中心とする地方大の市場構造と相補関係にあるという意味で、ビュッヒャアの閉鎖性に異議を唱えた。⁽⁴⁷⁾

なお、かかる円環市場=分業構造について、チューネンにより精緻な仮説を提出している。彼は次の諸前提を設ける。(1)貿易の可能性の無い孤立国、(2)全ての工業生産は孤立国の中心にある唯一の都市に集中し(鉱産物、加里塩は都市近傍に産出する)、(3)農業は都市の周辺で行われ、都市を唯一の市場とする、(4)都市への農産物の供給量は都市の需要量と常に均衡するし、都市の工業生産物は農民の需要に應える、(5)孤立国の土壤は一定の豊度、気候条件をもつ、(6)またその地形は平坦で道路は十分に発達をしているが、輸送機関は荷車に限られる、(7)また農業は常に「合理的」、「整合的」に営まれる。このような前提の下では、都市によって決定される農産物の価格と輸送費が、生産物と生産方法の立地を決める。かくて、都市近辺では価格に比し重量の大きいものか、蔬菜、牛乳のように腐敗し易いものが集約的に生産され(自由農法)、都市から遠ざかるにつれ、比較的輸送し易い生産物の生産地帯が、林業、輪作農法、穀草農法、三圃農法、牧畜の順で都市周辺に円環状に広がるという。その全体の大きさは半

径7.5キロとされている。⁽⁴⁹⁾

以上のチューネンの円環市場構造は、「孤立化の方法」(die isolierende Methode)に基づき明確な諸前提を立てた上での閉鎖性、自給自足性を伴う理論モデルである。農業立地に関しては具体性を伴った分業構造が提示されており、前提条件をはずした場合の貿易の影響、複数の都市が存在した場合、工業立地が都市外へ移動する場合の考察も行われている。⁽⁵⁰⁾ これを大塚の「局地的市場」仮説と比べれば、仮説作成の手続き、孤立国モデルの構造的構成(その内部での共同体間の分業という観点)、閉鎖性と開放性の有機的関連等の点で、遙かに勝れたものだといえよう。勿論それは、農業の立地という観点からの仮説であるから、「局地的市場圏」に関して直接有用である訳ではない。ここでは、チューネンとは逆に、農村内部に生成する商工業の核地集落を中心とする市場圏の実体的関係が問題であって、外部との関係を排除する閉鎖性を想定する理論的な必要性は無い。この点ではむしろペロウやヘブケと同様に、開放性を内包するような市場構造が有効であることは、これまでの考察から明らかであろう。

先ず、注目すべきは、「局地的市場圏」及びその中心たる核地集落は特化産業を軸にしているが、その事自体が、他の「局地的市場」やその中心たる他の核地集落、中世都市やその市場との交換を前提とした分業だという事実である。こういう「核産業」が複数、内部に重なり合い、地域内部での交換が行われる限りで、或る程度の自足的な経済圏になるとはいえ、矢張り外部の販路への依存が重要である。まして単一の特化産業が軸になる場合にそれは決定的である。但し隣接の「局地的市場」との局(核)地間分業に販路が見出せる場合と遠隔の中世都市との隔地間分業に販路が見出せる場合とでは、同じ依存でも内部への反作用に大きな

注(45) 前掲拙稿「近世初頭中部ドイツ……」(⇒)51頁以下及び英文 Rural small towns and market-towns……, p. 78 seq.; F. Phillippi, Zur Verfassungsgeschichte der Westfälischen Bischofsstädte, 1894, S. 2-6. フィリップはそこで中世都市の都市化、週市は都市化の結果であって、その理由ではないとしている。私が判告書で調べた結果でも、農村市場においては週市体制は明確な姿では現われず、旅籠(居酒屋)における売買や日市と週市を区別しない自由な取引が圧倒的である。こうした原初市場は文書に遺されていない為、把握しにくい、週市が或る程度の経済発展の結果、周辺農村に対する優位の象徴として設けられたことは確かである。

(46) Karl Bücher, Die Entstehung der Volkswirtschaft, 1906, S. 116-135.

(47) G. v. Below, Probleme der Wirtschaftsgeschichte, 1920, S. 78-79, 202-231. なお、対象の時代が異なるとはいえ、W. Christaller, a.a.O., S. 63-85. には最有力の地方都市(L型)から極中都市(M型)まで7つの類型の核地集落が想定され、108キロから4キロまでの半径の円環構造で1つの分業・市場体系が図示されており興味深い。

(48) H. v. Thünen, Der isolierte Staat, Teil 1, 1875, S. 1 f., 9, 18, 22, 105; 121 f.; Teil 2, 1875, S. 4 f.

(49) Ibid., Teil 1, S. 1 f., 389 f.

(50) Ibid., S. 264-326.

「局地的市場」仮説の方法的検討

違いが生まれる。いずれにせよ、かかる外部市場への依存性があるからこそ、「核地集落」が工業立地のみならず、商業的機能からの立地に基づき生成することが度々起るのである。

これを更に裏づけるのは、「核地集落」の市場の中で、歳市の重要性である。そこで取引される商品は、イギリスの例によれば、家畜や酪農製品の他、羊毛やホップが中心であったが、場所により繊維製品、皮革製品や魚介類もあり、農業用器具や家庭用品も活潑に取引されており、それぞれの地域の特産物市場という性格を持っていることが判る。⁽⁵¹⁾かつて私が「判告書」で調査した結果では、農村市場で最も際立つのは、週市ではなく、むしろ歳市であったが、最近の英国の研究でも同様の結果が報告され、さらに16, 17世紀の新しい商業の必要性に応えたもの、規制の比較的弱い歳市の方であったと指摘されている。⁽⁵²⁾歳市は、一方で有力中世都市のメッセ(大市)につながる古い市場関係であると共に、市場町や小都市相互、さらには依然として農村内部に埋没している農村市場をつなぐ新しい市場関係として評価されるべきなのである。大塚の「局地的市場圏」が閉鎖的自足性を特徴しているため、彼の仮説に基づく実証研究において、歳市のこういう側面が見落され、週市に不当に高い評価が与えられることになる。⁽⁵³⁾

なお、核地集落やそれを軸とする局地的市場の対外依存は製品の販路だけではない。原料や半製品それに器具、さらには食糧等の消費物資が「局地」地域内部で供給されない場合⁽⁵⁴⁾には、その面でも外部市場に依存せざるを得なくなる。そこで次に歳市だけではなく、より恒常的な取引の場である週市も含めた「局地的市場圏」の内部構造の開放性と閉鎖性が問題となる。

先ず注目すべきは、「核地集落」及び局地市場圏の特化産業であるが、この点で特定の集落に最終加工設備が集中するために、「核地集落」が生成発展することは、既に述べた通りである。工程別専門化による「核地集落」と周辺村落の間の分業及び交換は、それが純粋な形で進展すればする程、「核地集落」の周辺農村に対する優位性を確実なものとし、いわゆる農村内部での不均等発展が起る。だが、かかる核地・局地間の関係は、いろいろの形で妨げられ、中世都市と周辺農村の関係より自由なものとして現われる。第1に加工設備は自然条件に左右され、必ずしも核地集落の成立地点だけに集中する訳ではない。⁽⁵⁵⁾第2に原料、半製品の提供者である周辺農村の住民達は、自己の製品をどこで販売するかについて、選択の自由を持っている。⁽⁵⁶⁾特に「核地集落」生成の時期において、このことは妥当する。従ってこの面でも、閉鎖性は開放性と並立しており、週市も中世都市のそれよりは局地的商品交換に適応した形とならざるをえない。だが、他方、このような開放性に対して「核地集落」は、商業及び産業上の局地独占を固めて対抗しようとする。産業上優位に立てぬ場合に、商業上有利な地点に「核地集落」が成立することは、既に述べた。これは地の利を利用した自然成長的な局地独占であるが、それ以外に人為的な独占の試みとして、週市への取引の限定がある。元来、週市は中世都市が、住民の消費物資確保と市内工産物の販売機会保証の目的で、周辺農村に対して実行した取引強制の制度である。「核地集落」はこれを原料・半製品・完製品にも適用し、これらの取引を週市に限定し、農村内部での交換を禁止乃至制限しようとしたのである。これには絶対王政乃至領邦君主の経済政策という強力な援軍がつけられたのであるが、

注(51) A. Everit, op. cit., p. 534 seq.

(52) Ibid., p. 533, seq. 例えばソマーセットでは18世紀に16世紀当時既に存在したと思われる歳市が180であったが、この内市場町でのそれは39以下であったし、ケントでも1570年に60の歳市の内、市場町があるのは33に過ぎない。イヴリットによれば、これらの歳市の殆どは記録も残さず、その相対的自由により当時の需要増大に市場町よりも敏感に反応しえたのだとしている。なお、ドイツにおいても農村での歳市54に対し週市5という数字が与えられ、イヴリットの数字と符合する。

(53) 例えば、農村市場に関する勝れた実証的モノグラフである米川伸一の「中世イギリスにおける『農村市場の成立』」54頁では農村市場の史的考察にとり歳市は本質的に重要ではないとして、これを捨象して分析している。

(54) 例えば針金工業町アルテナでは、遙か南方のゾーゲン周辺の製鉄業から隣接のリュージンシャイトでオセムント鉄に加工。これがアルテナに供給されていたし、穀物は北方のゾースト、ヘルデッケ等の穀物市場から供給されていた。同じことは、ルール以南の伝統的的金属工業地帯全体にもいえる。F. Schmid, a.a.O., passim.

(55) アルテナの場合には地理的条件から広義のフライハイト地域内に水力作業場が集中しているが、隣接のリュージンシャイトや北部のエネッベ街道、ベルク地方のレムシャイト、ゾーリンゲン等では水力作業場は周辺地域に分散している。

(56) A. Everit, op. cit., p. 500 seq., 538 seq. 彼によれば週市の場合でも数個の市場訪問が常態であった。

(57) 例えば、1451年のザクセンの条例は「漂白所の為に働き、その製品を差し出す麻織工乃至は麻糸買付人は、彼が都市、

「核地集落」自身が周辺農村との自由な取引に満足せず、週市という制度を採用すること自体が、「核地集落」の周辺農村に対する局地的市場独占を意味するのである。⁽⁵⁸⁾

産業上の独占に関しても同様の現象がみられる。即ち、中世都市と同様の同職組合や類似の生産者結合を図り、独占的地位を確保すると共に、周辺農村内の工業経営もその影響下に置こうとする。針金工業町アルテナは本来同職組合の組織されぬ自由の町（まさに Freiheit!!）であったが、17世紀に針金の市況が沈滞するや鉄及び鋼針金の独占販売会社を作った。また隣接都市イザローンとの境界にあるエフィクセンの針金伸線工の帰属をめぐる抗争し、結局自己の影響下に置くことに成功している。⁽⁶⁰⁾ また、エルベ以東の上ラウズイツ南部の麻織物工業におけるツフフト・カウフやエルベ以西の農村工業都市におけるツフフトの組織化もその例証である。こうした試みに再び重商主義政策の援軍がつくことはいうまでもないが、それは周辺農村での生産制限という形をとる。⁽⁶²⁾

ところで、核地集落を中心とした「局地的市場圏」

の大きさも、歳市と週市では異なっている。イヴリットによれば、歳市が10~30マイル、週市が8~10マイルというのが、近世初頭イギリスの標準であるという。⁽⁶³⁾ 従って、同じ核地集落を中心にしても週市が近距離のより少ない農村共同体との市場関係であるのに対し、歳市の方はその3倍の遠距離内のより多くの共同体との市場関係であって、他の週市市場圏とも重なり、開放性をもっているのである。尤も、既に見たように地方により双方の市場距離は様々の偏差を示すのであるが、これは自然の条件に左右される所が大きい。それは共同体と共同体の間の交通関係を規定すると共に、それぞれの地域の特産物を決め、それが市場距離に影響をするのである。穀物は水運を利用して遠隔に運ばれる場合を除くと、かなり近距離の市場で売買されるのに対し、家畜はそれよりは市場距離が長く、イングランド中部及び北部では40~70マイルに達することが週市の場合でもあるという。羊毛や糸、布地も平均20マイル以上と到達範囲が長い。⁽⁶⁴⁾ こうした傾向は、当時最も自由な取引とされる私的取引活動においても確認されるが、局地内及び局地間の取引を核地共同体に

市場町・農村のいずれに住んでいても、この地方の凡ゆる都市及び市場町の市場日にのみ、自由な買付けをなしうるが、それ以外では買付けをしてはならない」とある。H. Helbig (Herausgeber), Quellen zur älteren Wirtschaftsgeschichte Mittelddeutschland, 1952, Bd. 4, Nr. 293. また1554年にイングランドで発布された「特権都市保護法」では都市、バラ、特権都市と並び公開市場を持つ市場町の特権も保護されている。R. H. Tawney & E. Power (editor), Tudor Economic Documents, vol. 1, p. 119-121.

注(58) この点で興味を湧くのは、週市体制を取るまでの農村市場の発展であるが、残念ながら殆ど史料が欠如している。イヴリットも特許状の与えられる前に商取引活動が「非公式市場」unofficial market という形であったが、詳細は不明であるという。A. Everit, op. cit., p. 476 seq. ドイツの判告書を整理した所では、村の居酒屋（旅籠）での売買、パン焼、醸造、売買の自由を約束された村内での取引、週市という三形態が検出できるが、中間の形態での商取引がどのようなものであったかは不明である。拙稿「近世初頭中部ドイツ……」或はこれがイヴリットのいう「非公式市場」に該当するのかもしれないが、制度化して日市と区別された週市と比べれば、まだその区別もなくルーズな自由さを持っているように思われる。面白いのは居酒屋乃至旅籠での取引で、エルベ以東のドイツ人植民地域でも原初的な農村内の商業活動として確認できる一方、16, 17世紀のイギリスで週市体制をこえる日常的な私的取引の形でもあったのである。エルベ以東に関しては Winfried Küchler, Das Bannmeilenrecht—Ein Beitrag der mittelalterlichen Ost-siedlung zur wirtschaftlichen und rechtlichen Verschränkung von Stadt und Land, 1964, S. 11-77, 125 ff. イギリスについては A. Everit, op. cit., p. 544, 549, 559 seq. イヴリットはそれ以外に農家、倉庫、納屋での取引もあげているが、最も注目すべきものは旅籠での取引であったという。週市体制が核地共同体を周辺農村共同体の間の不自由な規制を意味したことは、これらの事実からも明らかである。

(59) F. Schmidt, a.a.O., Bd. 2., S. 32 ff.

(60) Ibid., Bd. 1, S. 7-20.

(61) 拙稿「エルベ以東・上ラウズイツ……」(⇒)8号25頁以下、同「近世初頭中部ドイツ……」(⇒)24頁以下。Gustav Aubin u. Arno Kunze, Leinenerzeugung und Leinenabsatz im östlichen Mittelddeutschland zur Zeit der Zunftkäufe. Ein Beitrag zur industriellen Kolonisation des deutschen Ostens, 1940, passim.

(62) H. Helbig, a.a.O., Bd. 2, Nr. 120; R.H. Tawney & E. Power, Tudor Economic Documents, vol. 1, p. 338-350.

(63) A. Everit, op. cit., p. 498, 537. イヴリットは歳市について、10マイル以内を週市市場圏に当る部分、10-30マイルを局地的な歳市圏、30-75マイルを地域的歳市圏、75マイル以上を国民的歳市圏と呼んでいる。

(64) Ibid., p. 499.

「局地的市場」仮説の方法的検討

有利に人為的に制度化する市場町と比較すれば、その活動範囲は大きく、しかもより自由で、共同体の壁を取り払う来たるべき産業資本主義的商品経済に近づいたものと見ることが出来る。それはすでに「核地集落」を中核とする「局地的市場圏」からはみ出た市場関係なのである。⁽⁶⁶⁾

4. む す び

以上に考察した通り、大塚久雄の提示した「局地的市場圏」仮説は、一面においてその鋭い本質理解によりマックス・ヴェーバーの「内陸文化」やその延長線

上におかれる「局地的商品経済」をこえる「理念型」概念として、近代産業資本主義の起点を史実の中から別抉する功績を担う。だが、他方その「理念型」を作成するに当たって持つべき方法と予備概念が極めて一面的、且つ平板であり、その結果、別抉された近代産業資本主義の起点が封建制から資本制への移行というヨーロッパ史の複雑な史実から離れて、自然発生的に独り歩きすることになる。歴史家としての本質直観が方法に十分裏打ちされぬと、「成行次第」の客観主義、経済主義への道が拓ける好例であろう。

(経済学部教授)

注(65) Ibid., p. 544 seq.

		私的取引の担い手の居住地		
		売手と買手が同じ州に住む	売手と買手が違う州だが同じ地域に住む	売手と買手が別々の地域に住む
穀	物	46	40	13
牛		41	30	29
羊		46	37	18
羊	毛	34	28	38
木	材	67	33	—
雑		26	32	42
平	均	42	35	23

(66) Ibid., p. 544 seq. イヴリットはその取引が市場町をさけ、村々の旅籠屋が農家で行われたとしている。いわゆる行商もこうした取引に入るが、ドイツに関していうと、寒村や小都市の住民がこれに従事する場合が多い。イヴリットはむしろヨーマンやジェントリー、肉屋、酒屋、弁護士、書記等の比較的裕福な階層が私的取引の担い手であったという。Hedwig Kleinsorge, Die Hausierer das oberen Sauerlandes, Diss. Köln 1919; Edmund Strutz, Bergischer Handel und Bergische Händler im 17. und 18. Jahrhundert am Mittelrhein, in: Zeitschrift des Bergischen Geschichtsvereins, Bd. 81, 1965, S. 136-151.